

中国語学習者に関する一考察（三）

竹 中 佐英子

要 旨

本稿は明治学院大学の中国語教育の問題とその原因を分析し、明治学院大学の中国語教育に対して提言を行う。

キーワード：中国語研究，ピンイン，語順，履修者数

1. テーマ選定理由

筆者は2008年4月～、明治学院大学（以下、「明学」）横浜校舎非常勤講師として、国際学部の「中国語1 AB 2 AB」と、教養教育センターの「中国語研究2 AB」を担当している。「中国語研究」とは1年生選択必修第2外国語（独仏露西韓中から1言語）で学んだ知識を継承しながら、更なる発展的な知識・技能を身に付けていく中級レベルの中国語科目で、1年生で中国語を履修した2年生以上なら誰でも履修することができ、「中国語研究1 AB」「中国語研究2 AB」の2種類があるが、難易度に差はない。同科目の履修者は明学全学部においてゼロから1年間中国語を学んできた学生達であり、彼らが示す問題は明学の中国語教育の問題を反映していると言える。筆者は同科目の履修者が中国語で日記を付けることができるようになるよう、日文中訳練習を中心とした自作教材を用いて教育を行ってきたが、明学の中国語教育には以下の3つの問題があると考えている。

1つ目は、1年間初級中国語を履修しても、「ピ

ンイン」の読み書き規則が完璧には身に付いていない学生が一定数存在することである。中国語を記録する記号は漢字（中国大陸ならその画数を減らした簡体字）である。漢字のほとんどは意味を表す「偏」と読み方を表す「旁」から構成される「形声文字」であるが、旁はローマ字ほど見やすく読み方がわかるものではない。周有光1995, p.1によれば、現代中国語で常用されている漢字約7,000個のうち、旁が忠実に読み方を表す漢字は39%に留まるという。そこで中国政府は1958年、中国語の漢字音を表すローマ字表記法を制定した、これが「ピンイン」である。例えば中国語で「私」を意味する語は“我”であり、ピンインでは“wǒ”と表記、「ウォー」のように読む。ピンインはその表記から連想される読み方が実際の発音とはかけ離れているものも多く、例えば“ian”は「イアン」ではなく「イエン」，“si”は「シー」ではなく「スー」，“cong”は「コン」ではなく「ツォン」のように読む。ピンインは書く際にも規則がある。例えば三重母音“iou”は単独で音節を構成する時は“you”，前に子音が付く時には間にある“o”を省いて子音+“iu”と書く。

だから子音“d”の後ろに三重母音“iou”が続く時は“diu”と書くので、「ディウ」と読んでしまいそうだが、正しくは「ディオウ」のように読む。このようにピンインはその読み書きに様々な規則があるのだが、それは体系的で例外が無く、1度覚えてしまえば未知の中国語漢字音が一目でわかるようになる、非常に便利な学習ツールである。なお、現在出版されている中国語の教材や辞書は全てピンインで漢字の読み方を表記しているので、ピンインの読み書き規則を習得しておかないと、教材を音読することも、辞書を引くこともできない。ゆえに、初級中国語教材の冒頭数ページには必ずピンインの読み書き規則が示され、初級中国語を履修した学生は全員、初回～数回目の授業でこれを学ぶのだが、筆者担当の「中国語研究2AB」では毎年“ian”を「イアン」、「si」を「シー」、「cong」を「コン」と読む学生が後を絶たない。

2つ目は、最も基本的な中国語の語順をあまり習得していないことである。筆者担当の「中国語研究2AB」では開講当初、履修者に日文中訳をさせると、英語の語順に従って中国語の単語を並べて回答する履修者が多い。例えば、中国語では「明日学校に来る」は「明天来学校」と時間詞＋動詞＋目的語、「学校で勉強する」は“在学校学习”と“在”＋場所＋動詞という語順になる。これらの語順は初級中国語で必ず学ぶのだが、英語の語順「動詞＋目的語＋時間詞」（“I come to school tomorrow”）、「動詞＋前置詞＋場所」（“I study at school”）を借用して、*“来学校明天”と中国語の時間詞を文末に、*“学习在学校”と“在”＋場所を中国語の動詞の後に持って来る履修者が毎年一定数見受けられる。

3つ目は、履修者数が年度により大きく変動することである。筆者担当の「中国語研究2AB」

は2008～2010年度迄履修者が10数人程度だったのが、2011年度はその4倍の40人になった（表1-1参照）。この急激な履修者増により、中国語だけを用いて中国を旅行することができる学生から、ピンインすらほとんど読めない学生迄、その中国語力に大きな格差が発生、初回～数回目迄は事前に作成していた教材を毎回作成し直さざるを得なかった。

明学の中国語教育が成果を上げるためには、▽初級の授業を通じて全履修者がピンインの読み書き規則と最も基本的な語順を完璧に身に付けること▽初級で成果を上げた学生は中級迄継続して履修すること——の2点が不可欠である。では現在何故、初級中国語を1年間学んでもピンインや語順が身に付かない履修者が一定数いるのだろうか。年度によって中級迄履修する学生数が大きく変動するのだろうか。本稿はこれらの問題の根本的原因を考察するため、明学の中国語履修者に対する調査、分析を行った上で、明学の中国語教育に対して提言を行う。

2. 調査方法の紹介

2.1. 調査対象

本稿の調査対象は明学「中国語研究2A」履修者（2007, 2008, 2009, 2010年度入学者、それぞれ「研07」「研08」「研09」「研10」）、明学国際学部「中国語1A2A」履修者（2007, 2008, 2009, 2010年度入学者、それぞれ「国07」「国08」「国09」「国10」）である。研07, 08, 09, 10は中国語を1年間履修済の全学部2年生以上が選択科目として週1こま、国07, 08, 09, 10は国際学部2年生が選択必修の初習外国語として週4こま学ぶ。表1-1, 2に各調査対象の内訳を示した。「履修登録者数」とは「中国語研究2A」履修者

中国語学習者に関する一考察（三）

名簿に掲載された学生数、「実質受講者数」とは「履修登録者数」から1度も出席しなかった学生数を差し引いた数である。国07, 08, 09, 10にとっては「中国語1A2A」が必修なので、「受講者数」だけを掲載する。「第一志望」とはアンケート調査で「受験時、明学を第一志望とした」と回答した学生を指す。なお、研07, 国07に対しては入学方式を調査していない。

表 1-1 調査対象の内訳

グループ	研07	研08	研09	研10
履修登録者数	10人	17人	14人	46人
実質受講者数	10人 (100.00%)	16人 (94.10%)	12人 (85.70%)	40人 (86.00%)
第一志望	3人 (30.00%)	3人 (19.00%)	6人 (50.00%)	13人 (32.50%)
所属学部				
文学部	1人 (10.00%)	9人 (56.25%)	2人 (16.60%)	4人 (10.00%)
経済学部	8人 (80.00%)	3人 (18.75%)	5人 (41.60%)	18人 (45.00%)
社会学部		1人 (6.25%)	3人 (25.00%)	3人 (7.50%)
法学部			2人 (16.60%)	10人 (25.00%)
国際学部	1人 (10.00%)	3人 (18.75%)		2人 (5.00%)
心理学部				3人 (7.50%)
入学方式				
一般A	未調査	9人 (56.00%)	5人 (41.60%)	17人 (42.50%)
一般B	未調査			3人 (7.50%)
全学部	未調査		1人 (8.33%)	
センター前期	未調査	2人 (12.50%)		4人 (10.00%)
留学生	未調査	1人 (6.25%)		
自己推薦AO	未調査	1人 (6.25%)		1人 (2.50%)
指定校推薦	未調査	2人 (12.50%)	4人 (33.30%)	7人 (17.50%)
内部推薦	未調査	1人 (6.25%)	2人 (16.60%)	8人 (20.00%)

表 1-2 調査対象の内訳

グループ	国07	国08	国09	国10
受講者数	29人	20人	24人	24人
第一志望	14人 (48.00%)	4人 (20.00%)	12人 (50.00%)	8人 (33.00%)
入学方式				
一般A	未調査	10人 (50.00%)	7人 (16.00%)	9人 (37.50%)
全学部	未調査			1人 (4.16%)
センター前期	未調査	3人 (15.00%)	2人 (8.00%)	2人 (8.33%)
留学生	未調査	1人 (5.00%)		
自己推薦AO	未調査	4人 (20.00%)	4人 (17.00%)	4人 (16.60%)
指定校推薦	未調査	1人 (5.00%)	8人 (33.00%)	4人 (16.60%)
内部推薦	未調査	1人 (5.00%)	3人 (12.50%)	4人 (16.60%)

2.2. 調査実施方法

アンケート調査は研 07, 08, 09, 10, 国 07, 08, 09, 10 の 8 つのグループを対象に記名式で行った。質問事項とそれに対する選択肢は学生同士、あるいは教員と学生の対話中に出された意見を中心に作成、回答は選択肢から選ばせたり、自由に記述させたりした。なお、アンケート調査は異なる日時に複数回行ったため、調査毎に回答者数が異なっていたり、グループによっては調査を行っていない項目もある。

3. 調査結果とその分析

本章では明学の中国語履修者に対して行った試験、アンケート調査の結果を分析し、その特徴を探っていく。

3.1. ピンイン

明学の中国語教育が抱える最大の問題は、ピンインの読み書き規則が完璧に身に付いていない履修者が一定数存在することである（第 1 章参照）。そこで本節では「中国語研究 2 A」におけるピンイン教育の実践報告を行うと共に、ピンイン習得の成否を左右する要素を分析する。

川島 2004. p.36-38 は「音読すると前頭前野が活性化し、記憶力や空間認知力が 20~30% 増加する」という実験結果を報告している。そこで筆者は「中国語研究 2 A」「中国語 1 A 2 A」の授業でピンインの音読練習にできるだけ長い時間をかけ、音読によって学生の前頭前野を活性化し、ピンイン読み書き規則を理解、記憶しやすい状態を作る教育を行っている。この教育法は履修者がピンインの読み書き規則を身に付け、中国語の学習成果を上げるのに効果があるのか否か、を検証

するため、H23 年度春学期「中国語研究 2 A」第 11 週目の授業では、事前告知していない「ピンイン音読試験」を実施、10 個の中国語の単語をピンインのみを用いて書き、履修者に音読させ、1 単語を正確に読めたら 1 点を与えた（すなわち 10 点満点）。音読させた単語のピンインは全て同科目の授業中に学習したものである。【資料 1】は問題用紙の一例で、全 4 種類あり、1 人の学生の音読が終了すると、次の学生に対しては異なる問題用紙を提示し、前の学生の回答が後ろで待機している次の学生に聞こえて有利にならないようにした。以下、同試験の結果を分析する。

【資料 1】以下のピンインを声に出して読み上げなさい。

1. lù
2. gēge
3. kèběn
4. shòusī
5. háizi
6. cídiǎn
7. jintiān
8. nánbiānr
9. yánsè
10. céng

表 2 はピンイン音読試験の平均点、表 3 は同試験で誤答（読み間違い）が多かったピンイン表記上位 10 個を、それぞれ春学期末試験（筆記試験）の成績毎に示したものである。お断りしておくが、表 3 の正解と誤答のカタカナ表記はピンインの読み方を知らない読者にイメージだけでも掴んでもらえるよう、最も近い日本語音で代用表記しただけであり、このままカタカナを読んでも正確な中国語の発音にはならない。まず表 2 を見るに、最

表2 ピンイン音読試験の平均点（10点満点）

研10（36人）	期末試験上位（13人）	期末試験中位（13人）	期末試験下位（10人）
7.8点	8.3点	8.0点	7.2点

表3 ピンイン音読試験の誤答内訳

ピンイン	簡体字	正解	誤答	全体誤答（36人）	上位誤答（13人）	中位誤答（13人）	下位誤答（10人）
yan	演	イエ	イアン	24人（66.70%）	10人（76.90%）	8人（61.50%）	6人（60.00%）
ci	词	ツ	チ	12人（33.30%）	4人（30.80%）	5人（38.50%）	3人（30.00%）
si	司, 四	ス	シー	8人（22.20%）	2人（15.40%）	3人（23.10%）	3人（30.00%）
ceng	层	ツァン	セン	8人（22.20%）	1人（7.69%）	3人（23.10%）	4人（40.00%）
ian	典, 天	イエ	イアン	7人（19.40%）	1人（7.69%）	2人（15.40%）	4人（40.00%）
nu	女	ニュー	ヌ	7人（19.40%）	1人（7.69%）	4人（30.80%）	2人（20.00%）
cong	从	ツォン	コン	5人（13.90%）	2人（15.40%）	1人（7.69%）	2人（20.00%）
lu	绿	リュ	ルー	4人（11.10%）	1人（7.69%）	1人（7.69%）	2人（20.00%）
zi	子	ツ	チ	3人（8.33%）	1人（7.69%）	0人（0.00%）	2人（20.00%）
ge	哥	ゲ	ゲー	2人（5.56%）	0人（0.00%）	1人（7.69%）	1人（10.00%）

も平均点が高いのは期末試験の成績上位者であり、中位者より0.3点、下位者より1点上回っている。次に表3を見るに、期末試験の成績中位・下位者の誤答者数は“yan”“ci”の2種類を除いて上位者を上回っている。この調査結果から、ピンインを正確に読めるようになることは、ピンインや簡体字を正確に書くことができる、語順の正しい中国語の文を生み出すことができるなど、中国語学習に良い影響を与えていると言える。

再び表3を見よう。最も誤答が多いのは“yan”で、6割以上の履修者が「イアン」と読み間違えているが、この理由は登場回数にある。音読させた単語のピンイン表記は全て授業中に教えたもの

だが、同じく「イアン」と読み間違えそうな“ian”の方は“今天 jīntiān”（今日）“词典 cídiǎn”（辞書）“铅笔 qiānbǐ”（鉛筆）など、様々な単語で毎回の授業に登場したのに対し、“yan”というピンイン表記が含まれる単語は“颜色 yánsè”（色）“演唱会 yǎnchàng huì”（コンサート）の計2個だけだった。筆者は竹中2005a. p.68で、「学習事項を記憶、保持するには同一事項の登場回数を高めることが重要」との考察結果を得ていたにも関わらず、この点を自作教材に反映することができなかった。今後の教材作成では履修者が読み間違えやすいピンインを含む単語の登場回数を増やすよう、改善する。

【質問1】 ピンインは覚えづらい。

表4 ピンイン学習に対する評価

	研07（10人）	研08（16人）	研09（12人）	研10（40人）	国07（29人）	国08（20人）	国09（24人）	国10（24人）
全体	6人（60%）	6人（38%）	6人（50%）	19人（48%）	10人（34%）	3人（15%）	13人（54%）	10人（42%）
上位	0人	1人	1人	1人	0人	1人	2人	3人
中位	2人	3人	3人	7人	4人	2人	5人	2人
下位	4人	2人	2人	11人	6人	0人	6人	5人

【質問2】音読練習は好きではない。

表5 音読練習に対する評価

	研07 (10人)	研08 (16人)	研09 (12人)	研10 (40人)	国07 (29人)	国08 (20人)	国09 (24人)	国10 (24人)
全体	6人 (60%)	3人 (19%)	3人 (25%)	17人 (43%)	4人 (14%)	2人 (10%)	7人 (29%)	7人 (17%)
上位	1人	1人	0人	4人	2人	1人	2人	2人
中位	1人	0人	3人	7人	1人	0人	3人	3人
下位	4人	2人	0人	6人	1人	1人	2人	2人

表4, 5は質問1, 2に対して「はい」と回答した学生数をグループ毎, 春学期末試験の成績毎に示したものである。表4, 5の見方であるが, 質問1「ピンインが覚えづらい」と答えたのは, 表4が示すように研07では全体10人中6人(60%)おり, その6人の内訳は期末試験の成績上位者に0人, 中位者に2人, 下位者に4人いる, ということである。

まず表4を見るに, 質問1「ピンインは覚えづらい, あるいはどんなに勉強しても覚えられない」と答えた学生は, 初級中国語履修者の国07, 08, 09, 10では15%~5割程度, 中級中国語履修者の研07, 08, 09, 10では4~6割おり, いずれのグループでも期末試験の成績下位に最も多い。この調査結果から, 一定数の履修者はピンインの読み書き規則や各単語の正確なピンイン表記を理解, 記憶できぬままにしていること, そしてこのような履修者は中国語の学習成果もあまり上がらないことがわかる。次に表5を見るに, 質問2「音読練習は好きではない, できればあまりやりたくない」と答えた学生は, 初級の国07, 08, 09, 10では1~3割程度なの, 中級の研07, 08, 09, 10になると2~6割に上昇し, 各グループにおいて期末試験の成績中位・下位の方が上位者よりも多い。授業態度を観察していると, 上位者は概ね音読練習に積極的で, 恥ずかしがらずに大きな声を出して読んでいるのに対し, 中位・下位者は総じて消極的で, 声も小さめで, 中には音読練習中1

度も口を開かない, 教師を睨みつける, そっぽを向くなどして断固拒否する者もいる。筆者は竹中2008. p.235, 竹中2009. p.214で「音読練習に参加しない学生より積極的に参加する学生の方が中国語の成績が良い」との調査結果を得たが, 今回の調査結果はそれを更に補強するものであり, 音読練習への参加の仕方がピンイン読み書き規則の理解, 各単語のピンイン表記の記憶の成否を左右していると言える。

3.2. 語順

明学の中国語教育が抱えるもう1つの大きな問題は, 最も基本的な中国語の語順をあまり習得していないことである(第1章参照)。筆者は「中国語研究2A」「中国語1A2A」の授業で, 履修者に単語一覧表だけを与え, 単語をフレーズや文へと組み立てる日文中訳練習を行い, 履修者が正しい語順を理解するよう, 指導している。授業ではまず, その回の授業に登場する全ての単語を一覧表にして配布, 学生は教師の後について音読しながら, ピンイン・簡体字(第1章参照)の読み方と意味を確認する。次に日文中訳教材を配布, ここには単語の用法や語順のヒントが若干書かれているだけで, 中国語の例文は一切書かれていない。指名された学生は単語一覧表を見ながら, 既習事項を思い出しながら, ヒントを手掛かりに, 単語をフレーズや文へと組み立てる。この日文中訳練習を通じて, 学生は既習事項を思い出し, 類

表6 竹中の授業を通じて身に付いたと実感できる事項

	研10 (40人)	国07 (25人)	国08 (20人)	国09 (24人)	国10 (24人)
項目1	26人 (65%)	6人 (24%)	18人 (90%)	18人 (75%)	20人 (83%)
項目2	27人 (68%)	17人 (68%)	18人 (90%)	20人 (83%)	18人 (75%)
項目3	22人 (55%)	選択肢無	10人 (50%)	9人 (38%)	8人 (33%)
項目4	13人 (33%)	19人 (76%)	17人 (85%)	15人 (63%)	10人 (42%)

推力を働かせながら新出事項を学び、単語の意味・用法、語順・文型を会得していく。日文中訳教材を全部中国語に訳し終わった後、学生は教師の後に付いて何度も音読し、正確な発音・語順を確認する（詳細は竹中 2005b. p.133, 2005c. p.176 参照）。「中国語研究2A」では開講当初、英語の語順を用いて日文中訳をする履修者が多いのだが（第1章参照）、この教育法により、「中国語の語順は英語の語順と同じ」という誤った先入観が徐々に払拭されていき、学期末が近づくにつれ、英語の語順を借用する履修者も減っていく。本節では明学の中国語履修者がこの教育法をどう評価しているか、を分析する。

- 【項目1】 中国語の単語の意味、用法。
- 【項目2】 中国語の語順、文型。
- 【項目3】 日文中訳力。
- 【項目4】 中文日訳力。

表6は「筆者の授業を通じて身に付いたと実感できる事項」を列記し、当てはまるものを全部選ばせた結果である。国07に対しては項目3を選択肢に立てていない。項目2「中国語の語順、文型」を選んだ履修者が、研10、国07では約7割、国10では75%、国09では8割、国08では9割、といずれのグループでも比較的高い。また、中国語は格変化を起こさない孤立語であり、単語を文中のどの位置に置くか、という単語の用法を理解

することが語順を把握することにもつながるので、項目1「中国語の単語の意味、用法」を選んだ履修者は語順が身に付いたと実感していると解釈できるのだが、国07を除く4グループで6~9割以上の履修者が「身に付いた」と答えている。問題なのは、筆者が日文中訳練習を中心とした授業を展開してきたにもかかわらず、項目3「日文中訳力」を選んだ履修者が研10で半数を超えたものの、国08、09、10では3~5割に留まったことである。この理由は履修者側が「日文中訳力」を「もっと長くて難解な日本語の文章を中国語へ訳す能力」と考えているからかもしれない。しかし、表9（3.5.参照）からもわかるように、筆者の授業を10数回受講した後の春学期末試験の平均点は、どのグループでも8割以上をマークしており、これは中国語の語順、単語の用法をある程度正しく理解できたことの現れである。この教育法は明学の中国語履修者が正しい語順を身に付けるのに一定の程度の効果はあると考えられるので、今後もこの教育法を継続し、成績の推移を観察していく。

【資料2】 竹中の授業に対する感想

- ・何回も発音を確認するので、読み方がわかりやすかった。
- ・去年やった中国語をある程度思い出すことができた。
- ・基本例文を提示していただいたのは良かった。

- ・単語を配って、それに沿った問題だったので、難しすぎず、身についたと思います。
- ・同じ単語が何回も出てくるから、ピンインや簡体字を覚えた。
- ・同じ単語をくり返し使うことが多いので、身に付きやすくて良いと思った。
- ・沢山問題を問くことで、よく身についたと思います。
- ・問題をどんどん解くので定着しやすかったです。
- ・細かく分りやすいです。
- ・濃い授業で面白かった。
- ・テンポが速くて、今まで習ったことの確認にはいい授業だと思った。
- ・流れが早くて、集中して勉強できた。
- ・ペースが速くて、追いつかないことがあった。
- ・ペースが早い。

資料2は、筆者の授業に対する感想を履修者が自由に記述したものである。筆者は履修者に知識が定着するよう、「中国語研究2 AB」の教材を自分で作成、同一の単語や文型が何度も登場するよう編集し、授業でも単語一覧表や教材をくり返し音読させているが（上記参照）、この教材や教育法に対し、履修者は「何回も発音を確認するので、読み方がわかりやすい」「同じ単語をくり返し使うから身につけやすい」と記述、筆者の意図を正しく汲み取っていることがわかる。問題なのは、履修者によって教育量や授業進度に対し評価が分かれることである。春学期末試験の成績上位者は「沢山問題を問くのでよく身につく」（注：誤字は学生が記述したまま）「どんどん解くので定着しやすい」「濃い授業で面白い」「流れが早く、集中して勉強できる」など、日文中訓練問題の量の多さ、履修者を次々と指名して答えさせる流れの

速い授業を高く評価し、中には「今まで習ったことの確認になる」と物足りなささえ感じているのに対し、中位・下位者は「ペースが速い」「追いつかない」と記述している。履修者の中国語力には必ず格差があり、履修者が増加すればその格差はさらに広がる。どこに基準を置いて教育量や授業進度を決定するか、は再考の余地がある。

3.3. 履修者数

明学では初習外国語（独仏露西韓中から1言語）は1年生の時は選択必修であるが、2年生以降は完全選択となる学部が多く、中級中国語科目である「中国語研究」は年度により履修者数変動する。しかし、初級で学習を止めてしまっただけでは、中国語を用いてコミュニケーションできるまでには至らない。明学の中国語教育が成果を上げるためには、初級中国語履修者のうち毎年一定数が中級迄継続して履修できる体制を作り出すことが必要である。そこで本節では明学の学生の履修の仕方について分析する。

表7は「第2外国語科目を選択する際に考慮する事項」を列記し、当てはまるものを全部選べた結果である。研10、国10の共通点は考慮する事項の第1位が「言語そのものに対する興味、関心」、第3位が「難易度」であること、相違点は考慮する事項の第2位が研10では「開講曜日・時限」であり、国10では「言語使用地域の政治、経済、文化など諸事情に対する興味、関心」であることである。このような違いが生じた原因は、必修か選択かの違いによる。国10にとって、第2外国語は独仏露西韓中から必ず1言語を選択して履修しなければならない必修科目で、しかも週4こまもある。言語そのもの、あるいは当該言語使用地域に対する興味が無ければ、1年週4こまの第2外国語の授業は常に苦痛なものとなって

表7 第2外国語の選択基準

	研10 (40人)	国10 (24人)
言語そのものに対する興味、関心	30人 (75%)	17人 (71%)
開講曜日・時限	25人 (63%)	7人 (29%)
難易度	21人 (53%)	11人 (46%)
言語使用地域の事情に対する興味、関心	17人 (43%)	14人 (58%)

しまう。一方、研10にとって、第2外国語は完全選択科目の1つでしかない。学生はまず、卒業要件で時間割を埋め、その後空いている曜日・時限を選択科目で埋めていく。卒業要件の前後の時限に「中国語研究」が開講されていれば、単位数かせぎに履修者が増える。現にH23年度、筆者担当の「中国語研究2AB」の前のこまには、経済学部「経済統計学」、心理学部「心理支援論」、後ろのこまには、経済学部「経済数学」「ビジネス外国語」、法学部「刑法総論」など、各学部の選択必修科目が数多く開講され、履修者は皆これらの科目を受講している。この調査結果から、初級中国語では中国語およびその使用地域に対する興味・関心が履修者数を左右するのに対し、中級中国語では開講曜日・時限が履修者数を左右することがわかる。明学の中国語教育が成果を上げるためには、中級中国語科目をできるだけ多くの学部の学生が履修しやすい曜日・時限に設定することが極めて重要である。

3.4. 所属学部

明学の中国語教員と意見交換をしていると、「○○学部が良くできるが、××学部はあまり良くない」という話が出ることもある。教員のこういった感覚は果たして正確なのだろうか。「中国語研究」には明学のあらゆる学部で1年間初級中国語を学んだ学生が履修しに来ている。そこで本

表8 所属学部毎の期末試験平均点 (100点満点)

	偏差値	研07	研08	研09	研10
文学部	59	82.7点	87.8点	85.4点	74.6点
経済学部	58	82.6点	85.8点	88.5点	78.8点
社会学部	59		36.2点	95.1点	79.6点
法学部	60			92.6点	88.1点
国際学部	61	99.6点	81.3点		78.1点
心理学部	62				94.5点
グループ全体		84.3点	83点	93.6点	81.9点

節では同科目履修者の所属学部と中国語の成績の関係について分析し、学部による中国語の学習成果の違いを考察する。

表8は持ち込み一切不可で実施した「中国語研究2A」春学期末試験(100点満点)の平均点をグループ毎、学部毎に示したものである。偏差値はベネッセのインターネットサイト「進研ゼミ高校講座大学別目標偏差値」(<http://shinken.zemine.jp/hensachi/>)を参照した。表8を見るに、最も平均点の高い学部は研07では国際学部、研08では文学部、研09では社会学部、研10では心理学部、と毎年異なり、特定の学部の成績が良いとか、偏差値と成績が比例する、といった傾向は見られない。この理由は、▽春学期末試験が開講当初ではなく、10数回の授業を行った後に行われたこと▽筆者が使用教材を年度毎に履修者の知識量に合わせて若干改定し、それに伴って試験内容、出題形式、難易度も変化すること▽同科目の各学部履修者数が毎年大きく変動すること(表1-1参照)——などによるだろう。今後も引き続きデータを収集し、分析していきたい。

3.5. 入学方式

本節では入学方式と中国語の学習成果の関係について分析する。

表9 入学方式毎の期末試験平均点（100点満点）

	研08	研09	研10	国08	国09	国10
一般A	83.7点	86.4点	81.9点	91.1点	84.9点	87.3点
一般B			79.1点			
全学部		99.4点				86.4点
センター前期	90.9点		86.6点	85.5点	99.3点	84.2点
留学生	36.2点			90.9点		
自己推薦AO	73.2点		60.7点	81.5点	63.5点	79.3点
指定校推薦	92.3点	91.1点	75.0点	96.6点	93.1点	91.0点
内部推薦	86.0点	97.1点	89.9点	100.0点	77.1点	82.3点
グループ全体	83.0点	93.6点	81.9点	89.7点	83.6点	84.8点

表9は持ち込み一切不可で実施した「中国語研究2A」「中国語1A2A」の春学期末試験（各100点満点）の平均点をグループ毎、入学方式毎に示したものである。研08, 09, 10は年度毎に使用教材を若干改定するため、試験内容、出題形式、難易度も異なるが（3.4.参照）、国08, 09, 10は使用教材が全グループ一緒に、試験内容、出題形式、難易度もほぼ一緒である。表9を見るに、最も平均点が高い入学方式は、研08, 国10では指定校推薦、研10, 国08では内部推薦、研09では一般入試全学部日程、国09ではセンター試験利用前期であり、最も平均点が低い入学方式は、研08では留学生、研09では一般入試A日程、研10, 国08, 09, 10では自己推薦AOである。以下、センター試験利用、留学生、AO、指定校、内部推薦の入学者数は一般入試ほどおらず（表1-1, 2）、単純比較はできないことを念頭に置いた上で論じる。一般入試、センター試験利用など、学力考査を経て入学した履修者の平均点は概ね8割以上をマークしており、グループや入学年度による差も小さい。一方、指定校推薦、内部推薦入学の履修者の平均点はグループや入学年度によって大きな差がある。例えば指定校推薦では研08が研10を17.3点、内部推薦では国08が国

09を22.9点も上回っている。学力をあまり問われない自己推薦AOを経て入学した履修者の平均点は全グループにおいて下位であり、成績良好とは言えないだろう。

筆者は竹中2011. p.275で入学方式と初級中国語春学期中間試験の成績の関係を考察、今回の調査結果と同じく、一般入試、センター試験利用入学者の方がAOや推薦入学者よりも成績が良いとの結果を得ている。中国語の学習成果を左右する要素の1つは入学方式、すなわち大学入学迄にどれだけの基礎学力、知識、学習習慣、学習技法を蓄積してきたかである、と言える。

4. 分析結果の総括

以上、明学の中級中国語科目「中国語研究2A」および国際学部初級中国語科目「中国語1A2A」履修者のピンイン学習、授業評価、履修の仕方などを分析したが、明学の中国語履修者には以下のような特徴が見られる。

- (1) 一部の履修者は、初級中国語を1年間履修しても、ピンインの読み書きが完璧には身に付いていない。原因は「音読練習嫌い」にある。

- (2) 日文中訳練習を中心とした教育法は、履修者が中国語の正確な語順を身に付けるのに一定の効果が見られる。
- (3) 完全選択の中級中国語科目の履修者数は開講曜日・時限に左右される。
- (4) 学部と中国語の学習成果にはあまり関連性が見られない。
- (5) 入学方式の違いは中国語の成績に影響を及ぼす。学力考査を経て入学した学生は中国語学習で高い成果を上げる。

事であるが、これこそ中国語教員最大の使命であり、決して避けて通ってはならない。

- (2) 中国語の語順を理解させる教育の強化。日文中訳練習中心の教育法は一定の効果がある。
- (3) 時間割設定方法の再考。できるだけ多くの学生が履修しやすい開講曜日・時限に中級中国語科目を設定することが、明学の中国語教育が更なる成果を上げることにつながる。
- (4) 入学者獲得方法の再考（竹中 2011. p. 281 参照）。

5. 今後の研究課題

以上の分析結果に基づき、今後の明学の中国語教育の研究課題として、以下の4項目を提案する。

- (1) ピンイン教育の強化。ピンインはその読み書き規則を理解すれば、その後の中国語学習が非常にしやすくなるのだが、わからないままでは教材を音読できない、辞書を引けないなど、学習が困難になり、語順理解など中国語学習全般に悪影響を及ぼす。全履修者にピンインの読み書き規則を定着させるため、初級にせよ、中級にせよ、中国語の授業では毎回一定時間量の音読練習を行う必要がある。音読指導は教員の体力をすり減らす、酷な仕

参考文献

- 川島隆太 2004. 『脳と音読』, 講談社現代新書
- 周有光 1995. 《汉语拼音方案基本知识》, 语文出版社
- 竹中佐英子 2005a. 「記憶モデル理論から見た中国語発音教育のあり方」, 『目白大学心理学研究』第1号, p. 61-72
- 竹中佐英子 2005b. 「目白大学人文学部「中国語1・2」の授業に関する一考察」, 『目白大学高等教育研究』第11号, p. 131-139
- 竹中佐英子 2005c. 〈日本学生的汉语病句辨析〉, 『目白大学人文学研究』第2号, p. 171-182
- 竹中佐英子 2008. 「中国語の学習成果を左右する要素の分析」, 『目白大学人文学研究』第4号, p. 229-241
- 竹中佐英子 2009. 「中国語学習者に関する一考察——明治学院大学と目白大学の比較——」, 『カルチャー』第3巻第1号, p. 211-221
- 竹中佐英子 2011. 「中国語学習者に関する一考察（二）」, 『カルチャー』第5巻第1号, p. 271-282